

連載

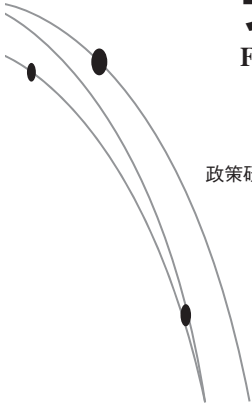
フィールド・アイ

Field Eye

NY から——①

政策研究大学院大学 黒澤 昌子

Masako Kurosawa



進歩主義的な小学校の教育カリキュラム

2015年9月より1年半の間、ニューヨークにあるコロンビア大学日本経済経営研究所にて客員研究員として過ごす機会を得た。娘は米国に出発当時、小学3年生。母子のみの生活には大きな不安もあったが、ティーンエイジ突入前のまだ母親を頼りにしてくれる時期に、二人で一緒に大波小波乗り越える経験をするのも良いのでは、と娘を連れてゆく決心をした。

まず一番の問題となったのが小学校である。地元の公立小学校に入れようと思っていたが、せっかくの機会なので、以前から良い評判を聞いていた私学にダメモトで応募したところ、大変有り難いことに受け入れて頂けることになった。

そもそも日本の私立小学校であれば、日本語を書いたり話したりできない子供を受け入れることなど考えられない。わが子のお勉強の足を引っ張ることになるからと、保護者も嫌がるに違いない。ところがこの学校にとって、多様性は大変大きな意味もっていた。とくに娘の学年にはアジア系の生徒がほとんどいなかったことが功を奏したのであろう、何ともラッキーであった。

この学校は、いわゆる進歩主義的な教育手法・理念をもつ教育者を養成する大学院に併設された小中学校で、教室の在り方からカリキュラム、親の学校への参加の在り方など、日本で私自身が、また親として経験してきた教育とは良くも悪くも全くの別世界であった。また子供を介して、ニューヨークで生活する子育て世代の実態についても肌で感じる事ができた。そこでこれから3回に分けて、教育や子育て、そして親

のワーク・ライフ・バランス等について感じたことを記してみたい。まず第一回目の本報告は、この進歩主義的な小学校の授業とカリキュラムについてである。

1学年は2クラスあり、1クラスあたりの生徒数は20名。それに主任と、大学院生の副担任がつく。体育、音楽、ドラマ、スペイン語、図書館、図工はすでに1年次から教科担当制であり、4年次以降、算数と理科も教科担任となる。まず教室に入って気づくのは、机の並び方である。日本のように黒板に向かって一斉に机が並んでいるということがなく、教室の中心付近には円卓がいくつかある。一方の壁にはホワイトボードがあり、それを丸く囲むようにベンチが据えられたミーティング・スペースがある。もう一方の壁側にはいくつかの低い本棚で区切られたスペースがあり、主に読書やヨガに使われる。そこホワイトボード前のみカーペットが敷かれ、子供たちは床にも座る。ちなみにそのときには胡坐をかくのが米国流である。日本でお馴染みの体育座りは、横を歩く人が躓きやすいのでダメなのだそうだ。

この教室で行われる授業のほとんどは4～5人の円卓グループ単位で進められ、グループのメンバーは毎月入れ替えられる。授業では、グループに自分の考えをシェアし、他人の意見を良く聞き、受け入れ、さらに発展させるというグループ・ワークが中心だ。教師は問題を投げかけ、生徒が自分たちで解決策を考え出せるようリードし、マネージする。かなり高度なテクニックである。お互いの顔を突き合わせる円卓というレイアウトは、それぞれがどのような貢献ができるのかを分かりあい、お互いをresourceとして信頼するという訓練を行う上で必要不可欠なのだそうだ。そうした訓練を積み重ねれば、社会に出て他人を信頼し、協働(collaborate)できる人間になれるという。学年が上になると、教室の構造も若干変わり、グループ・ワークを行う人数も多くなる。小学校の頃からこうしたディスカッション・ベースの訓練を続けることができれば、きっと自分の意見を人前で臆することなく論理的に言える大人になるに違いない。

カリキュラムもかなり面白い。とくに興味深かったのは科目の垣根を飛び越えて統合的に学習する機会が多い点である。この学校では年次によってテーマがあり、たとえば3年次前半のテーマはシルクロードであった。するとマルコ・ポーロの時代に、シルクロード沿いの都市で人々がどのような自然環境の下でどの

ような生活を営んでいたのか、西と東の間にどういった物の交易があったのか等を理科や社会科として学ぶ。そして当時のサマルカンドやバグダッドに地中海沿岸からやってきた行商人になったつもりで家族に手紙を書き、そこでの人々の生活を模型として作製し、お話を作ることが国語や図工のプロジェクトになる、といった具合である。しかもテーマは毎年同じだが、その年の生徒が何に興味を示すかによって、そこからどの方向に掘り下げるかは年によって違うのだという。

何か一つのテーマについて、深く自由に追求してゆく喜び。自分が小さい頃にそうした教育を受けられていたらと想像するだけでワクワクしてしまった。この学校が標榜する、生涯にわたって学び続ける人を育てる教育、学ぶことの楽しさを学ばせてくれる教育はまさにこれなのだと感じた。

このことは、この学校が学ぶ意欲とか態度というものを変重要視している点にも表れている。日本の学校で個人面談に行くと、あなたのお子さんは、何々はできるが何々はできませんねと、どちらかというところと行動やテストなどの「結果」に触れ、特にできないことをできるように家庭でもフォローしてください、と締め括られることが多いように思う。しかしこの学校での個人面談は、行動の背後にある意図や意欲に対するコメントばかりで最初は困惑してしまった。意欲ばかりあっても結果が伴わなければ問題ですよねえ、というこちらの問いかけに、親としてはそんなことを心配するよりも、結果ばかりに注目して子供の意欲を削ぐようなことのないように気を付けてください、と逆に窘められてしまった。

しかしながら心配なこともでてきた。これはあくまで素人的発想であるが、第三者機関から適格認定を受けなければならないとはいえ、適用される学習指導要領がなく独自のカリキュラムを貫くことができるとなると、この年次にはこの内容を学ばなければいけないという知識の積み重ねに穴が開くことにもなり得る。担当者にカリキュラム上、連邦あるいは地方政府による縛りはないのかと聞いたところ、少し考えてから、

定期的に防災訓練をすることだけです、と言われて驚いた。しかも、宿題は少なくともテストもほとんどない。多すぎる宿題もテスト攻めも、学ぶ楽しさや意欲、創造性を削ぐからとの話だが、公立小学校よりも宿題が少ないというのには驚くと同時に不安も募った。

学校での宿題が少ないのだから、放課後のお稽古事ではお勉強要素の強いことをやっている子供が多いのではと思いきや、少なくとも娘の学校についていえば全くそうではなかった。習い事スケジュールは日本に負けず劣らずびっしりであるが、内容はスポーツや音楽がほとんどである。とくにスポーツでは男女共にサッカーやテニス、武道に人気があった。音楽では日本でお馴染みのピアノ、バイオリン以外にもギターやチェロ、クラリネット、声楽などもあって、バラエティ豊かである。その多くは、学校内で提供されており、通常の学童と同じように子供を預かるサービスも夜6時までやっているのだから、共働きの親にとっては大変な難い。下校時間直前でも連絡すれば預かってくれるという柔軟性もあった。

学ぶことの楽しさを学ぶのだから、あとは自分で学習すればよいと言われればそれまでだが、それにはこの学校を去った後も学びへのモチベーションを保ち続け、学び続けられるかどうかが鍵となる。こうした教育の成果を開花させるにはそれだけ自己責任が大きいということか。それと共に、どれだけ学びを発展させやすい環境にあるか、つまり家庭や地域の社会経済的環境にも依存するという意味で、かえって所得格差の拡大につながり得るのかもしれない。米国のダイナミズムをもたらすひとつの源泉を垣間見た気がした。

くろさわ・まさこ 政策研究大学院大学教授。最近の主な論文に「職業能力開発施策の現状と課題：OECD諸国における若年支援の在り方から」『季刊社会保障研究』Vol. 51, No.1, pp. 44-52, 2015年, “Organization adjustments, job training and productivity: Evidence from Japanese automobile makers” (with Ken Ariga, Fumio Ohtake, Masaru Sasaki and Shoko Yamane) *Journal of the Japanese and International Economies*, Vol. 27, March, pp. 1-34, 2013. 労働経済学, 応用計量経済学専攻。